

アユの瀬づくり

昭和40年代と同じ規模のアユ産卵場面積の復元をめざし、アユが産卵しやすい「砂利が川底にふわりと堆積した瀬」が広がる川づくりを平成14年度から進めています。

アユの産卵場となる瀬が広がる昔ながらの河原の風景の再生

アユが産卵できる瀬の再生

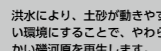
入田箇所

生い茂った河畔林の伐採・間伐、川の中に堆積した土砂の掘削を行い、アユの産卵場が形成されやすい流れを取り戻しました。

人の力



土砂の掘削



自然の力



取り組みの効果

①アユの産卵に適した川底に変わりました

整備後の瀬には、泥や砂がたまり固しまった川底が少なくなり、きれいでやわらかな川底が広がりました。

整備前



整備後

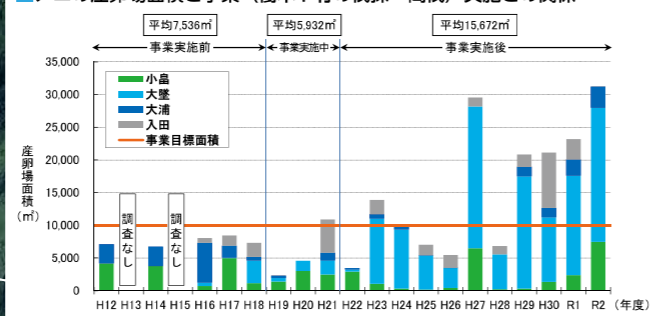


②アユの産卵場面積が拡大しました

平成29年度以降は、昭和40年代(10,000m²)の倍以上の産卵場が、安定して形成されるようになりました。

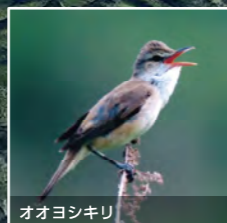


■アユの産卵場面積と事業（樹木や竹の伐採・間伐）実施との関係



③河畔林は生き物にも人にも愛される空間になりました

明るくなった河畔林には、河畔にふさわしい動植物が増え、絶滅危惧種の保全にもつながっています。また、多くの人々の憩いの空間「入田ヤナギ林」としても親しまれています。



魚のゆりかごづくり

四万十川の生き物を育む汽水域の浅場の再生

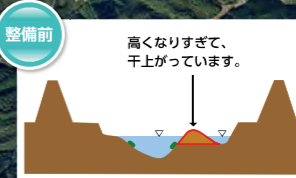
汽水域本来の生態系の復元をめざし、スジアオノリとコアマモの生育に適した浅場の再生を平成22年度から進めています。

スジアオノリ場の再生

不破・山路箇所

高くなりすぎている砂州や中州を掘削して、スジアオノリの生育に適した浅場を整備しました。

整備前



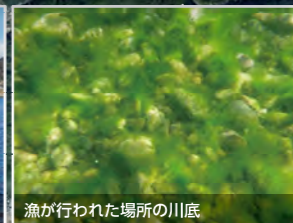
整備後



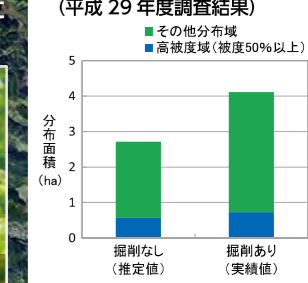
取り組みの効果

スジアオノリの分布域が広がりました

事業を実施した場所では、スジアオノリの生育面積が1.5倍に広がり、収穫できる密に生えた場所も1.3倍に拡大しました。



■事業実施の有無によるスジアオノリの生育面積の比較(平成29年度調査結果)



コアマモ場の再生

実崎箇所

コアマモが生え、魚の子どもなどが育つことができるよう、水際にワンド※を整備しました。※川の本流とつながっているが、池のようになっている場所。

整備前



整備後



取り組みの効果

ワンドは魚の成育場となっています

ワンドを利用している魚類の大半が5cm未満の小さな魚です。また、汽水域にすむ魚やカニのすみかにもなっています。



■ワンドを利用している魚類の体長区別の割合(令和2年度調査結果)

